

言葉

覚書 15

物を書くようになってすぐまともなものが書けなくなった。

結構のある小説、理路の通った論説、いずれも面白くなく全く書けなくなった。書きたいとも思わなくなった。

たまに頭の通りが悪くなり、はたからみるとよくなったときに少し通じることをいうと、ちゃんと菓を飲んでいるのだろうか、体験から逃れているのだろうかとか見当違いの想像と微笑ましいような眼差しを向けられて、そういうときはおむつのなかでよりいっそう激しく放尿したくなる。むしろおむつをはずした瞬間に放尿したくなる。放尿は時に正義だ。

廊下を歩いていると、両脇にいつも同じような感覚でうつろな表情で、というより中毒症状やひとりで脳内で闘志を燃やしている人たちが、昼の日光を浴びて、外部と交流している。頑張れよとおむつをした私はふらふらでそこを通り抜ける。天井を突き抜けるように、地面を睨みつけながら、腹はまっすぐ突き出して。

中庭に四葉のクローバーが密生している一角がある。誰も気づいていないのかむしろ不気味に思っただけか、手はつけられずにいる。岩陰になり日当たりも悪く、小

さくなれるから私は彼女か彼らが風で微かにそよぐのをみながら岩に張りつきながら、耳を澄ましている。小さな声をききとろうと。

ある日、エアコンもきかないような図書館の自習室で勉強する学生に紛れて、私も勉強する学生だったじぶんに、官能小説を書いていた。図書館の廊下の窓に差し掛かる木の枝からはリスが飛び乗り、図書館を行ったり来たりしていた。薄暗い古い建物でいつも人がいても図書館だからというわけではなく、静かだった。

もっと小さい頃は母とプラスチックの赤いカゴを持って、絵本などを借りにきていた。

私は勉強もせずに官能小説ばかり書き続けていた。主人公は変態だった。いつもなぜか同棲している年上の女の人の歯ブラシをしゃぶっていた。プロレスごっこと称して子供たちは女の体に触れたがった。

それから私は AV 監督になり、ストーリー性のある作品を作ることにこだわった。AVなのに女はほとんど裸にならず、むしろ最後まで裸にならないのではないかと、いうところで裸になったりならなかったりした。ならなかったりしたものだから男はおこって怒って酷評する。主演女優

のひとりはやさしい作品を作ってくださいありがとうございますと引退するときに礼をのべた。彼女がいちばんきれいにみえる作品を撮ろうと思っていた彼女だった。体ではなく彼女ごときれいだと思わせる作品が撮りたかった。AVというジャンルである必要があったのか？とある人は言った。AVでなければならなかったと思うと私は答えたが明確な理由は言えなかった。それはあえて言葉にする必要もないと思っていた。わかりきっているじゃないか。わかりきっていることがわからない人だけがいつも問うている。

彼女はヴェールを纏い(比喩ではない)、教会で天を仰ぎ、日記を綴り讃美歌を歌う日々を半分ドキュメンタリーとして撮った。半分ドキュメンタリーというのは彼女は教会に行かないし讃美歌も歌わないからで、ただ日記は書いていたから。あの年の夏の日差しを彼女とともに収録できたことは私にとっても幸福なことだった。何本も並ぶ彼女の作品の中で脱がなかったのは当たり前のように私の作品だけだった。それを AV とする必要があったのか？と人は問うが、何度も問われるうちに私はまともに答えることはせずにその都度考えるようにわかりませんと言うことにした。

(2023.7.20)

覚書 16

作者は読者に歓迎されるように書く。こ

れはしかしおかしいのではないか。作者と読者に共通の一望監視方式が働いているのではないか？

という言い方が大袈裟なら、教室の中で先生に褒められたいという生徒根性の延長なんじゃないか。

作者は自分にかすかに聞こえてくる声や音に呼応して書くのが、書く態度として最も誠実なのではないか。

(中略) 小説家というのは、もともと何が書きたいか、はっきりとしたものを持っていたわけではなく、ただ書きたかっただけで、しかしそれでは何も書けないから、

キャリアのスタートにおいて、何かわりとはっきりしたことを書くわけだが、そのうちに書きたいこともなくなり、ただ「書きたい」という気持ちだけが残る。

(保坂和志「みすず」アンケート「2012年に読んだ5冊」)

正確さ緻密さを根拠にしているこの社会を批判するために、正確・緻密な論理を元にしたら、この社会を大本(おおもと)において認めることになってしまう。

(同書)

昔書き留めたメモが出てきて、読み返し

ていた。本もそうで、昔読んだ本の書き込みも私が書いたのだろうが、全く書いた覚えがない。本は読んだ覚えさえない。いっさい覚えていない。

山口百恵の『蒼い時』を読み返したが、全然覚えていなかった。読み直したいという気持ちが湧いたとき、読んだときの印象だけが蘇る。それは読んでないのと一緒かというところというわけではないのだろう。印象として溶け込んでいる。

私の髪の前には悪魔がぶら下がっている。毛先から毛先へと移動していく。へらへら笑ながら、「今日はちょっと寒いなあ」。ジャンパーで彼を覆い、家族をのせて車を走らせる。

amazon prime で大島弓子『綿の国星』のアニメがみられるようになったと教えてもらい、空いた時間に少しずつみた。漫画でしか読んだことがなかったが、読んだ内容も忘れていたので漫画とアニメの相違について云々することもできない。ただちびねこはちびねこだと思った。洋書の翻訳もそうだが、翻訳でも伝わるものは伝わる。翻訳でなくても伝わらないものは伝わらない。しかし伝わる人には伝わる。

子供をおろし、悪魔とお見送り。寒空を裸足に靴をはいて、しかしジャケットは着てかけていく。発表会だ。

子供は育つ。父親がどうしようもなくとも。蒼い時を読み返して、そういう意味でほっとした。

ボロキレ一枚まとめて、公園をさまよう。夜。悪魔と。月は？雲がかかってみえない。ベンチに仰向けにねころび、ワインをラップ飲みしては星をながめる。悪魔はもぞもぞうたた寝。元気だせよ。夜なんだから。

警官がきて、なにしていると問うた。「みての通り」「身分証明書は？」「なぜです」みせる理由がないと伝えた。「公園で寝ているのがなぜわるいのですか」「こんな時間に」などということを行った。こんな時間だからこそではないですか。店もあいていない、ホテルも泊めてくれない、夜があけるのを待っている。「家は？」ありますよ。家だっていつでも帰れるわけではない。さあ、寝かせてくれと私は警官に背を向けた。ベンチと体のあいだで砂がじゃりじゃりと音を立てた。

(2023.12.17)

覚書 17

私はいま右足を出したのか左足を出したのかわからなくなり、右足を出した後にまた右足を出しそうになったと思って左足を出そうと思った先に左足をいま出したばかりだったと思って右足を出そうと思ったりしていた。そんなことをし

ているうちに電車を乗り過ぎて終点まで来てしまった。夜は深まり駅の改札口前で呆然としていると、終電ですと告げられる。正しく乗ったつもりでも乗り間違え、正しく乗った場合も乗り過ぎてしまう。知らない寂れた町の夜は人の気配もなく、車も通らないような山林に囲まれ歩けば歩くほど駅から遠ざかるほど人為の影がうすれていく。人為、人為。呟いた。叙情的で俗っぽいものが好きだ。人影もなく、風の音もしない、静かな夜を歩いていた。俗物をこよなく愛している。また呟いた。

ちょっぴりセンチという漫画のセリフに姉が笑っていた。中学の頃。意味わかる？センチメンタルってこと。

そういうことが好きだとおもって、ただ歩いた。左足だか右足だかわからない。センチメンタルは好きだがストーリーは嫌いだ。ストーリーのある話が嫌いだ。反吐が出る。結構の破綻がないなど嘘もいいところだろう。リリカルな音楽は好きだがストーリーは嫌いだ。

小島信夫の寓話を読みながら、キッカーズを聴いている、猥雑な品評会をしている。お前も好きなんだろ。男だろうが女だろうが、俗物ではない人間がいるのか？お前は違うといたいのか？その下衆な欲望をひた隠したいのか？どうでもいい。心底どうでもいい。

山道に寝そべり、もう何も考えないことにした。人間はいない。動物もない。小さい虫がたかるだけだ。電車に乗る前にコンビニで買ったおにぎりのレシート

をポケットの中で弄りながらただ空を見ていた。眺めているのではない、見ていた。

待つわとポニョを交互に口ずさんだ。友人だった山田くんがアイドルの追っかけをやめると言い出したときのことを思い出していた。森閑とした薄暗い舗装されていない道を歩きながら。砂利道で砂がすれる音をわざと大きく立てながら。山田くんはなんと言ったか。どうでもよいことだ。しかし彼の顔は言っていた、俺やめるよ、追っかけやめるよ。彼女が大きくなりすぎた。大きくなりすぎたとかそういうことでやめる程度のものだったのかと私は尋ねた。そうだ。その程度のものだったのだ。小さいだろ。小さい。小さいね。私は言った。小さいね。山田くんは笑った。彼女は目の下にくまがあって、そこがよかったのだけど、あるときなくなった。くまがあるかないかとかそういうことだけで、と言いかけてそういうことだけではないのかと私は気づいた。山田くんは最初から好きではないことをしていたのだ。

そういうことを思い出していた。山田くんは自転車にのって、彼女の団扇をもって、入道雲をバックになんの悩みもなさそうで、制服を着ていて、恋人もいなくて、勉強もできなくて、かっこよくなくて、アイドルの話ばかりするから、大学にもいかななくて、20年後くらいにたまたま会ったとき、私は誰かわからなくて、彼が学校の教師にあることで怒られたあとに私に見せた気まずそうな弱々し

い笑顔を少し薄ぼんやりさせたようなかすかな口角の変化をみるまでは、、、

そうしたことを考え、居場所がないわけではないが帰りたいという思いもなく私はここにいるのかと思った。私が放尿したときに、世話をする病棟の田中さんといったか、きつい顔の女性が肩を押したときの惨めな気分が蘇って、もう帰らなくていいかとも思った。誰も探しにこなければ帰らなくていいだろう。ここで干からびよう。

私は進歩しない。旅をするのだ。フェルナンド・ペソア。

夜は明けない、あと10時間くらいは。静かな夜だ。アラームも聞こえない。木々がそよぐこともない。月光が照らす光と影と土の冷たさと私が体を振った時に衣服と土が擦れる音があるばかり。こういう時は歌うか、囁くか、呟くか、叫ぶか、踊るか、眠るしかない。目を閉じて、歌う、囁く、呟く、叫ぶ、踊るを繰り返す。眠りが訪れることはない、という予感があった。

足の裏に忘れるなど書かれているマジックの文字をシャワーで洗い落としながら、忘れてしまったことを思い出そうとしていた。必死ではない、というのも私はその頃には忘れたことも忘れていいるのだから。左足を洗い、右足を洗い、左足を洗い、右足を洗い、左足を洗い、左足を洗い、左足を洗い、右足を洗い、右足を洗い、右足を洗い、右足を洗い、

を洗い、左足を洗い、左足を洗ったかもしれない。そしてまた左足を洗い、左足を洗い、右足を洗い、右足を洗い、右足を洗い、右足を洗ったかもしれない。

私は仕事の一つを思い出した気がして外へ出た。「どうして靴を履いてないの」と問う子供がおり、私はまた靴を探しに行くはめになった。しかし目覚めると私は家にいないことがわかった。私の家はどこだ。そうだ家を探しにきたのだ。何も、旅をしているわけではない。「目的を忘れてはいけない」私が最も嫌いだった高校教師の言葉を反芻する。風を感じる。ようやくだ。風が吹いている。感覚が戻ってきたようだ。常識が戻ってきたようだ。常識だ！常識だ！歓喜せよ！常識だ！

常識人の顔をして、地面を這いつくばって、砂を舐め糞尿を垂れ流せばよい。

茶色い髪をした高校生たちが、電話を空にかざして二人で眺めている。自然な笑顔を作っている。子供たちは父親と手を繋いで橋を渡っている。父親が腕をあげると子供が少し持ち上がる。右側と左側を交互に持ち上がる。カフカではないが、この絶望が幸福なのだろう。

(2024.6.2)

言葉を随時募集しております。どのような言葉でも構いません。応募は下記のメールアドレスまでお願いいたします。

rinshoubungeiigakukai@gmail.com